

暗い部屋

安部孝作

カーテンが開かないまま十日過ぎた。そもそも縞柄の布二枚は縫い付けてある。開くべからず、光漏らすべからずという警報がサイレンと共に町中を奔り回ったのだ。息を、身をひそめていなければならぬ。動きを見られてはいけない。この間動いた埃はどれほどあるだろうか。静かなまま、この部屋はどんどん暗くなってゆく。光がわずかな扉の隙間やカーテンの裾から逃げ出していく——しまった、捕え損ねたのだ——それともすり抜けられたのか、光は如何なる障壁をもすり抜けるゆえ……。吐き出される息はただ黒く腐っている。この部屋は闇で霞んで見える。もうすべてを終わりにしようと思つた——握つた？ 誰が——ナイフは太腿に刺さつたまま動かない。噛みちぎつた舌は床を這いずつて、もはや違う生き物となつている。ダニの踊り食い、生ごみの地引網、舌はしこたま肥り、もう三度交接し、五匹に増殖している。大きな赤い牛蛙と、小さな赤い蛭が痙攣して、青い粘液を飛ばし、楽しげにおしゃべりもする。その機能は万全なのだ。

少年の人形が踊り出す。カフカス製で、コサックさながらの強靱なダンス。本棚の隅から転がって来た右腕が持ち主を探しあぐね、隻腕のまま踊り続ける裸体の人形は軽くなつた右肩のことなどもう忘れてしまつてゐる。つぎはぎだらけの身体、人形は痛みを感じていない、血を流すこともない、ただ、悲しみのみを感じている。目玉は風化して色褪せ、唇は土色している。それでも固く張つた均整な唇はまったく震えることなく美しい。これほどにぎくしゃくした動きをするのは、腰や膝がグロテスクにねじ曲がるのは、結局人形の身体が隅々まで硬直してしまつてゐるからだろう……。昔はこうではなかつた、この人形も瑞々しく細胞の一つ一つを、腱を弾かせていた。そして動きはもつとなめらかで、時折歪む表情、唇にはもつと淫らな、高貴な美しさがあつた……。水底でまるまる甲殻動物のように。

台湾製の少女の人形が靴を落とした。楓のような髪に、蜥蜴のようなしなやかな身体をしたこの少女は恋人を探して彷徨つてゐる。恐らく闇の終わらないこの部屋では見つけれないだろう。その恋人は太陽を射し抜く勇者なのだから。——にもかかわらず彼女の蕩尽されえない生命が血管を針のように奔る。だからいずれ月へ雲に乗り飛び立つのだ、この底のない夜が支配する部屋から——月とはしかしどこなのか、上

昇は脱出を意味するのだろうか……ここは底のない底なのだ。だが無謀にも少年の右腕は靴を拾い、少女の人形の足に履かせた。野犬の毛並のように、赤銅に紫水晶が映えたこの靴は、この人形にとてもよく似合っている。少年はきつとこの靴に口づけをし、この人形の手の甲により多くの口づけをするだろう。もう魂などないのだと空虚の漣に触れ、色褪せた唇の先端には感覚と精神の残滓を感じ、右腕も失くし。壊れている身体に張り巡らされた神経をすべて遮断してもなお、この唇にのみは彼の意識が宿っている——唇は、探っているのだ。そして少しずつ漏れ出す熱い息に意識は融け込み、霧消し、最後は何一つ言葉を発することもできないまま、その場で倒れてしまう。少女の人形はしかし、痕跡を残すことない固い唇に、僅かな痛みと怒りを感じ、しばらくして忘れようとする、ブラックオパールの鱗を一枚一枚剥くように、傷痕よりも激しい痛みに苛まれながら。そして黒い雄鼠たちは貴石の肉塊、おぞましい記憶の鉱石をこぞって奪い合う。この少年はもはや唇にすら存在が残っていない。だから少女が彼の影を、身体を踏みつけたところで誰も咎めることなどできない。それどころか、そこに肉体が放置されていること自体が問われねばならない。なぜおまえはまだそこにいるのだ、と。その役割を、あの牛蛙のような舌が務めることは言うまでもない。舌のみが今、言葉を知っている。たとえ虚偽に満ちた言葉であっても。舌のみが知っているのだから、舌はもう祭司を気取る。これは古代の智慧——さて問うがい、なぜおまえはそこにいるのか、と。

哀れな少年の亡骸はこうして排除された。時計の針によって引き回され、発条に弾かれた。挽歌を小さな声で歌う本が一冊布団の隅に置かれ、その脇で幼児の映った写真が小さなアコーディオンを弾いている。彼の亡骸はゆっくりとゆっくりと崩れ、いつの間にか眼に見えないほどに崩れ、消えてしまった。人形の形をしたまま消えてしまった。やがてその形は降り積もった埃の中で化石となるだろう。

秘儀を筋肉から糞のようにひじり出した舌は、その矛先を、間違いなくこの私にも向けてくる。これはわかっていたことだ。ナイフに号令を下すのも時間の問題だ。舌にはその権限がある。万が一その命令に実行義務がなくとも、五匹の筋肉の塊はナイフを強引に操り、深く鼠蹊部を切り開くだろう。どうせ動かない人間だ、手こずることはない。簡単に解体できるだろう。窓から誰かに見られることもない、扉が開かれることもない。鍵は今、湯気の立つ紅茶をゆっくりかき混ぜているところなのだ。あの薔薇の紋章が施された鍵は、既にこの部屋を管理する権限を得ている。だが所詮は警察程度で、本当に支配しているのは時計でもなく、あの舌なのだ。憎き——。全くもって私と交わることはないはずだ——固よりそれは私の一部だったのだから、青い切り取り線が引かれたこの肉体の——。ところが、ただ私が動かさず、舌は動くという違いだけで舌と私は対立し、物を代弁する気になっている。所詮は支配者の分際で。

もう臓腑がひとつ残らず腐ってしまい、鼻先や耳からぼろぼろ壊死している。髪の毛は剛々としている。もう本来なら一刻も早くこのナイフを自分の手で首に深く引い

てしまいたいのだが、どうにもならない。そもそもなぜ私はここにいるのか、それを自分で問いかけることを忘れていた。そもそもこのナイフはどうして太腿を貫通して床に刺さっているのだろうか。ここが誰の部屋なのかを忘れていた、自分の部屋なのか、そうでないのか——そのどちらでもないのか……。そもそも居座っているのは自分にほかならないのではないか……。だとすれば舌にも一理あるのかもしれない——周りの本が眼を背けている。口元を歪め、なにかを囁いている。鳥の鳴き声が外との距離感を告げてくれている。だが、今やその距離のスケールは変わってしまったようだ。あまりに固い壁は、これほどの厚みでも絶望的だ。誰かが来る、そう予感した。胃壁を食い荒らしている寄生虫が、げっぶをした。

赤いテーブルに置かれたパソコンがうんうんうるさい、部屋の持ち主がVideosを開いたまま放置しているのだ。ベースが何重もの円を紫インキで描くなか、ベッドに立った一人の雲雀が上衣、スカート、薄いタイツと脱いでいく。くり返しくり返し、終わることなく流され続ける動画、発射され続ける光子が、今や砂時計となって世界を反転させ続けている。白い砂がガラスの管を流れ落ち、お椀型に少しずつ積もり、山型となり、円錐となる。均衡を保ったままこの円錐は時間の先端を上方に突き出す。そしてまたひっくり返され山体崩壊、白い砂は流れ落ちる。いつかこのガラスの管が折れる時、漏れ出した白い砂は赤いテーブルに撒き散らされ、うっすらと滅びの文様が描かれる。そうなれば時間の粒子が散乱する、日差しが幾重にも重ねられたガラスに衝突するように。きつと眼が眩むだろう、だが一瞬のことだ。だからそのことに気を留める人はいない。気付けばまた新たな砂時計がひっくり返されている。

がちやりと鍵の開かれる音がした。紅茶に浸かっていた鍵が慌てて飛び出しカップをひっくり返した。いくらでも自分の複製が、その薔薇の、無限に重なり膨らみ続ける肉襲のように存在することを忘れていたのだ。まだ湯気の立つ液体が床にじんわりと拡がり、黒い水溜りを残す。紅茶は熱いまま既に腐っていたようだ。あるいは湯気を立てたままもうとうに冷めていたのかもしれない。その水溜りには埃が浮いている。そして放置された新聞紙の端から、徐々に染み入っている。書かれた文字が妙な輝きを持ち始めた。舌の一匹がその文字を判読しようとしている。それにしても他の舌はどこへ隠れたのだろうか。それに少女の人形は恋人を探しにどこを彷徨っているのだろうか。この部屋は暗い。殆ど何も見渡せない。だが、もしかすれば眼が眩んでいるだけなのかもしれない——そういえば、壁に張られたポスターを瞥見すると、草は燃え、空は駱駝の毛皮を広げたようだった。

聞きなれぬ足音が少しずつ迫ってくる。いや、静かなままだ、単なる鼓動ではないのか。しかしながらはつきりと影が現れた。その動く影は手を伸ばし、懐中電灯を走らせた。そしてナトリウム照明の朱光がこの部屋を照らし上げた。その影は依然影のままだった。それは確かにただの影だったのだ。その影は影にもかかわらず、その輪郭には立体的な、物質の重みが浮き彫りになっている。そして無言で私に近づき、刺

さったナイフを引き抜くと、拘束されたまま皮膚と皮膚が癒着していた四肢や首、床ずれを起こして床木と癒合した足の皮をそのナイフで切断した。もう大丈夫ですよ。影は力が強く、いとも簡単にやっつけてのけた。そうして私の四肢は自由になった。舌が冷蔵庫の影から低めた声で叫ぶ。なぜおまえはそこにいるのか、と。

だが私には答える術がない。舌を喪っているから。だが、立ち上がれば何の問題もない。歩み去れば何の問題もない。舌を失くし、臓腑を腐らせたがまだ息をしている。恐らくあらゆることを忘れてしまっているが、それでもこの部屋から出ることはできない。影がゆっくと背中に張り付く、気泡をつくることなく。黒い蛆虫が大量に剥がれ落ちる。そして宙に浮かんだまま蛹となり、還り、緑の蠅となって飛び立った。この部屋のなかを舌に捕食されぬように忍び、いつまでも飛び回り、白い砂を細い足で弄繰り回すのだ。そして彷徨い続ける少女に、隠された珊瑚の星屑を届けるだろう。紛れ込んだ、体験したこともない時間が、降り注ぐ流星のように、彼女の眼に映される。そしてその一瞬の後、彼女の眼にはふたたび暗い部屋が映ることだろう。

カーテンの向こうには何があるのか、何かあるのかを知らなかった。いや、間違いなくそこからやってきたことを、忘れていただけなのかもしれない。になるのだ。そうだ、になるのだ。

扉は軽々開かれた。ノブは冷たく、蝶番は軋んだ。見たことのない風景。それはただの団地六階の廊下から眺める郊外の輪郭なのだ、ビル、屋根、道路、駐車場、空地、公園、川、どれも輪郭のみを残して消えている。ベランダに干された色とりどりの洗濯物が蒸発している。柔軟剤の香りが、仄かに伝わる。いや、多分、どこかで花が咲いているのだ。枯れた木々を赤い蘭が囲んでいる。空があまりに眩しく、煙突が噴き出す煤煙までもが銀や火花のように輝いている。そのなかを鋭い鉄棒が突き抜けていった。巨大なフルートが突拍子もなく吹かれたのだ。胸の内側で汗が流れた、心臓がかすかに震えている。背後で扉が重く閉ざされた。